



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ペー・ヤー・チャアダーエフ「哲学書簡」（翻訳及び解説）I
Author(s)	外川, 継男; Togawa, Tsuguo
Citation	スラヴ研究, 6, 65-87
Issue Date	1962
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/4962
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113170.pdf



哲 学 書 簡

ペー・ヤー・チャアダーエフ

外 川 継 男 訳

解 説 (1)

ピョートル・ヤーコヴレヴィッチ・チャアダーエフ (circa 1794-1856)¹⁾ の八編から成る哲学書簡を訳出するにあたって、以下において書簡の成立事情、テキストとその出版の過程などにつき略述する²⁾

「哲学書簡」と題する本書の表題は、チャアダーエフ自身の原稿には見当らず、誰が何時名付けたかについては従来不明とされていたが³⁾、1928年にチャアダーエフの新たな書簡の原稿とともに発見された、彼のビヤゼムスキー (П. А. Бяземский) あての手紙によって、チャアダーエフ自身の命名によるものであることが明らかとなった。⁴⁾

しかして書簡体で書かれた本書が誰にあてられたものであるかについても、後に「哲学書簡」を出版したガガーリン (И. С. Гагарин) と、ゲルツェン (А. И. Герцен) がそれぞれ推測したところであるが、⁵⁾ 今日ではこれがパノヴァ (Е. Д. Панова) という夫人にあてられたものであることがわかっている⁶⁾。

1826年7月、丸三年にわたるヨーロッパの旅から帰国したチャアダーエフは、ブレスト・リトフスクで官憲の取調べを受け、Н. ツルゲーネフ、ヤクーシキン、トルベツコイ、ムラヴィヨフ・アポストル兄弟ら、彼の友人であるデカブリストとの関係などにつき訊問されるが⁷⁾、8月26日 (露暦一以下同じ) 釈放されてモスクワに帰るも当局の

1) チャアダーエフの生年については、1792年、1793年、1794年、1796年などの異説があるが、大百科はじめ今日研究書の多くは1794年説をとっている。これは彼の系図、出生証明書、元老院記録などにもとずくと思われるが、ケネーの詳しい考証によれば、彼の生年を確証するに至らぬ。
cf. Charles Quénet, Tchaadaev et les lettres philosophiques. Contribution à l'étude du mouvement des idées en Russie, Paris, 1931, LXV-LXVIII

2) 従ってここでは書簡の成立に至るチャアダーエフの精神的・知的発展については触れぬ。

3) см. Сочинения и письма П. Я. Чаадаева под ред. М. Гершензона, т. I, М. 1913, стр. 368 (Гершензон の解説)

4) см. «Литературное Наследство», Т. 22-24. М. 1935, стр. 10 (Шаховской の解説) «Заглавие моей книги было бы такое: «Философские письма, адресованные даме», «Lettres philosophiques, adressées à une dame».

5) ガガーリンはЕ. Н. ОлорOVAを、ゲルツェンはЕ. Г. ЛевашOVAを推測した。cf. Heinrich Falk (S. J.), Das Weltbild Peter J. Tschaadajew's nach seinen acht "Philosophischen Briefen", München, 1954, p. 29

6) ガガーリンとゲルツェンの誤りを指摘し、パノヴァ夫人の名を最初にあげたのはジハレフである。cf. Quénet, op. cit., p. 95 なおチャアダーエフの甥であるジハレフ (М. И. Жихарев) については Сочинения и Письма, т. I, стр. III~IV参照

7) この間の事情を示す資料としては彼の供述者、兄あての手紙などがある。см. «Литературное Наследство», т. 19-21, 1934, стр. 16-32; Сочинения и Письма т. I, стр. 67-72 (供述書についていえば、後資料は前資料を簡略化したものである)

監視下におかれ、9月以降はモスクワを離れてその伯母たるシチェルバートヴァ（Кн. А. М. Щербатова）の持村に三年余にわたる孤高の生活を送ることになる。

前述のパノーヴァ夫人は当時夫とともに近くに住んでおり、チャアダーエフはここで彼女と知り合ったわけである⁸⁾。ローンギノフ（М. Н. Лонгинов）のいうようにチャアダーエフが彼女を愛していたかどうかについては疑問があるが⁹⁾、彼が《しばしば彼女に会い、そのことに慰めを見出して》¹⁰⁾いたことは事実であろう。いずれにせよこの《自らを取巻く空虚な感じに悩まされていた》¹¹⁾パノーヴァ夫人が、モスクワに帰ってからチャアダーエフにあてた次のような手紙が、¹²⁾彼をして「哲学書簡」を書く直接のきっかけを作ったことは確かである。

お手紙をさしあげようと思ひましてからかなりの時がたつてしまいました。ご迷惑にはなりますまいか、あなた様はもう私のことなどいささかのご関心もお持ちになつていらつしやらないのではないかと案じて、筆をとることをためらつていたのでございますが、これが多分最後のお手紙になるだろうと考えまして、ここにこのお手紙をお出しする決心をいたした次第でございます。

つらいことではございますが、私は自分がもうあなた様のかつてお示し下さいましたご愛顧を失つてしまいましたことを存じておりますし、また私が宗教について学びたいと申しあげました時に、あなた様がそれを私の本当の気持ではないと思ひになられたことも存じあげております。このことは私にとりましてこの上なくつらいことでございます。たしかに私には短所がございますが、偽りの見せかけをするなどという考えが私の心に生じたことは決して決してなかったということだけはお信じになつて下さいまし。私はあなた様がどんなにか深く宗教上のお考えに没頭なさつていたかを存じあげておりましたので、あなた様のお人柄に対する敬服と深いご尊敬の念から私もまたあなた様と同じ考えに尊念せねばと思うに至つた次第でございます。そして私にとりましてかくも新しい感情に身を委ねました時、私は自分の気持からすべての熱意と感激とをもつてそれに打ち込んだことでございます。あなた様のお話なさるのを聞いております間、私は信仰を持つておりました。その時の私には自分の確信が完全で何一つ欠けるところのないもののように思われたのでございます。それがあとになって一人になつてみますと、もろもろの疑惑がおこつてまいりまして、自分の心がカトリックに傾いたことが悔まれるようになってまいつたのでございます。と申し

8) Сочинения и Письма т. I, стр. 201 (1837年1月7日付 Л. М. Цынский あて手紙)

なお、パノーヴァ夫人については、М. Гершензон. П. Я. Чаадаев. Жизнь и Мышление, спб. 1908, стр. 202-203; «Литературное Наследство», т. 22-24, стр. 10-12; Quénet, op. cit., pp. 94-95; Falk, op. cit., pp. 29-32 を参照。

9) ケネーはこれを否定している。Quénet, op. cit., p. 94

10) Сочинения и Письма. т. I. стр. 201 (前記 Цынский あて手紙)

11) «Вестник Европы», 1871, 9, p. 15, n. 2, cf. Quénet, op. cit., p. 94

12) このパノーヴァ夫人の手紙（原文フランス語）は、ゲルシェンゾンが、その著 П. Я. Чаадаев, Жизнь и мышление の中に収め（стр. 201~202）、後に Сочинения и Письма 中に再録している。（т. I, стр. 372-373）

でも私には、あなた様が間違っていられしやるはずはないということを、くりかえし自分にいいきかせる以外に何の確信もございませんでした。そしてこのことは、まこと私の信仰に大きな力をおよぼしたことでございますし、その動機と申しますのは心底から人間的なものだったのでございます。自分の力ではどうすることもできませぬこういったもろもろの感情が私の健康をいぢるしく損ね、たえざる焦躁と自分自身に対する不満の中に身をおいていたと申しますならば、私がひどく誇張もし狂気じみてもいるようにあなた様には見えるかも知れませぬ・・・あなた様はその生まれながらのお気質の中に厳しいものをお持ちですもの・・・私はあなた様が私どもの社会から今までよりも遠のいて行かれることに気付いてはおりましたが、そのわけをお察し申すことはできないでおりました。この点につきまして、あなた様が私の夫に申された一言が私をはっとさせたのでございます。自分があなた様に与えた印象を考えて私がどれほど苦しんだかは申しますまい。それは私が常日頃世の人々の考えをあたどっていたことに対する、苛酷ではございますが正当といわねばならぬ罰なのでございますもの・・・しかし今や筆をおかねばなりません。はたしてこのお手紙によりまして私が決して偽りの見せかけをしたり、あなた様のご友誼に対して何か一役演じたいなどということはいささかも考えなかったということ、あなた様に御納得していただけますかどうか。もし私があなた様のご評価を失ったといたしましたなら、それはこの世の何物でもうめあわせることのできぬことでございますし、たとえ私がこのような不幸に魅入られるようなことは何一つしなかったのにと考えてみましても、あきらめきれぬものでございます。おさらばでございます。もしお返しのお言葉をいただくことができましたなら、どんなにか嬉しいことでございまいしょうが、そのように自分で自分を甘やかすことはいましめねばなりませんまい。

C. Panoff

チャアダーエフの第一書簡が以上のパノーヴァ夫人の手紙をきっかけとして書かれたことは事実であり、またそのように考えてはじめて哲学書簡の冒頭や末尾が理解されるのであるが、¹³⁾少なくとも第二書簡以後は彼女は書簡の執筆に当って何如なる役割をも果してはいない。¹⁴⁾そして第一書簡といえども、執筆の期間中にチャアダーエフが彼女の夫に貸した金銭上のトラブルからパノーフ夫妻との交際が断たれるにおよんで結局、書簡は彼女に送られることなく、¹⁵⁾1836年、ナジェージンの編集する「テレスコープ」15号に無署名で発表されたのであった。¹⁶⁾

この「テレスコープ」に掲載された第一書簡はチャアダーエフの生前に出版された唯

13) ゲルシェンゾンはこの事実を強調している。Герцензон, op. cit., p. 66

14) コワレはこの点を強調する。Alexandre Koyré, Etudes sur l'histoire de la pensée philosophique en Russie, Paris, 1950, p. 20, n. 1

15) Сочинения и Письма, т. I, стр. 201~202 (1837年1月7日付 Л. М. Цынский あて手紙)

16) Сочинения и Письма, т. II, стр. 3~20 このテレスコープに掲載された哲学書簡はゲルシェンゾンによって Сочинения и Письма, т. II, стр. 3~20 に収録されている。

一のものであるが、ロシア語の翻訳であり、しかも少なからぬ削除を有する。しかしてその訳者が誰であるかについては今日まではっきりされていない。すなわち、ゲルシェンゾン¹⁷⁾はレムケの研究にもとずき、資料的根拠はないが伝えられるところではこれが、ケッチェル (Н. X. Кетчер) の手によるものであるとしている。¹⁷⁾これに対しシュクリノフは最近出版されたその著書の中でケッチェル説を斥け、これがベリンスキーによってなされた旨強調しているが、¹⁸⁾ともすれば強引ともみられるその主張には十分な裏付けがあるとはいえない。

さらにこの第一書簡がテレスコープに載るにあたって、それがナジェージンのいうようにチャアダーエフ自身の希望によるものであるか、それともチャアダーエフが後に兄あての手紙に述べているように、彼自身の知らぬ間に印刷に付されたかについても疑問なしとせぬが¹⁹⁾チャアダーエフがその一連の書簡を以前から出版せんとする意図をもっていたことは事実であり、²⁰⁾しかもそれが一つの使命感に由来するものであっただけに²¹⁾、テレスコープ掲載にあたりチャアダーエフ自身関与するところがたとえなかったとしても、このことは単に彼が検閲を考慮して国内での出版が難しいと考えていたからであって、²²⁾出版の意図を根本から否定するものではない。

その後1860年、すなわちチャアダーエフの死後四年して、彼と生前から親交のあったガガーリン²³⁾が、フランスの雑誌《Correspondant》に、《Tendances catholiques de la société russe》と題する一文を寄稿し、この中に第一書簡のオリジナルなフランス語のテキストを収めた、また同年彼はパリとライプツィヒで同じタイトルの小冊子をも発行している。²⁴⁾これを後に言及するガガーリンの編集せるチャアダーエフの選集と比べるとスタイルの上で十四箇所の相違が見られるが、²⁵⁾後に述べるシャホスコイ版と比べてみても省略はなく、²⁶⁾テレスコープに掲載された第一書簡よりはるかに勝っている。

翌1861年にはゲルッエンがこのガガーリン版とは関係なしに、「テレスコープ」にのった第一書簡を「パリャールナヤ・ズヴェズダー」の第六書に転載した。²⁷⁾

しかしその後ながきにわたってチャアダーエフの著作集として用いられたのは、1862年にガガーリンが発行した《Oeuvres choisies de Pierre Tchadaïef²⁸⁾ publiées pour la

17) Там же, т. I, стр. 376, т. II, стр. 3

18) П. С. Шкуринов, П. Я. Чаадаев, М. 1960, стр. 24~26

19) Сочинения и Письма, т. I, стр. 203-204. см. там же. стр. 206 (И. Д. Якушкин あて手紙) なおこの点についてはケネーの詳しい考証がある。Quénet, op. cit., pp. 226-230

20) Сочинение и Письма. т. I, стр. 161~162 (1831年6月17日, 7月7日付 А. С. Пушкин あて手紙) см. Гершензон, там же, стр. 134-135, Falk, op. cit., pp. 36-37

21) Сочинения и Письма, т. I, стр. 161 (前記 Пушкин あて手紙)

22) Там же, т. I, стр. 203., 206

23) И. С. Гагарин (1814-1882), Князь, Сенатор Сергей Иванович の息。外交官。後(彼自身の言葉によれば)チャアダーエフの影響もあってカトリックに傾き、イエズス会員となる。彼については《Звенья》т. V, М.-Л. 1935. стр. 208 及び Quénet, op. cit. p. XI, n. 1 参照。

24) см. «Литературное Наследство» т. 22-24, стр. 6

25) Quénet, op. cit., P. 102

26) «Литературное Наследство» т. 22-24, стр. 6

27) Там же.

28) チャアダーエフの名のオートグラフについてはケネーの考証がある。Quénet, op. cit., pp. LXIII-LXV

première fois par le P. Gagarin de la Compagnie de Jésus, Paris-Leipzig》である。これは表題の示す如く選集であるが、哲学書簡についていえば第一から第四までの四編をおさめている。しかしこれは後にゲルシェンゾン²⁹⁾やケネー³⁰⁾によって推測され、シャホフスコイ (Д. И. Шаховской)³¹⁾によって明らかにされたところの、次の如き大きな誤りをおかしている。すなわちこのガガーリン版の第二、第三書簡は、実はチャアダーエフ自身によって番号づけられた八書簡中の第六、第七書簡に相当するものであり、しかもガガーリン版の第四書簡は「哲学書簡」のシリーズには入らぬものである。³²⁾にもかかわらずこの選集はローンギノフによってその出版が伝えられるや、³³⁾そのかなりの部数がロシア国内にひそかに持ち込まれ、³⁴⁾四十年以上にわたってチャアダーエフの唯一の著作集としてその役割をつとめたのであった。³⁵⁾

ロシア国内において「哲学書簡」の発行が許されるようになったのは1905年の革命以降のことであり、それまではわずかにプイピン (А. Н. Пыпин) が1871年に発表した論文³⁶⁾の中で、このガガーリン版にもとずいてチャアダーエフの言葉を引用するにとどまり、1901年にボグチャルスキー (П. Я. Богучарский) がその著³⁷⁾の中に、「哲学書簡」の露訳を入れんとしたが許されなかった。

「テレスコープ」以後、ロシア国内で「哲学書簡」が出版されたのは漸く1906年になってからである。この年ゲルシェンゾンは「哲学と心理学の諸問題」誌上にガガーリン版の完訳を掲載したが、1908年にはその著「ペ・ヤー・チャアダーエフ、生涯と思索」の中にもこれを再録している。³⁸⁾かかる出版事情の好転はこれ以外にも二つの出版を³⁹⁾可能にしたが、しかしこれらはいずれも「テレスコープ」から転載か、ガガーリン版の翻譯であって、新しい資料にもとづくものではなかったのである。⁴⁰⁾

29) Гершензон, там же, стр. 64~72

30) Quénet, op. cit., pp. 101~109

31) 1861年に生まれる。Князь, 労働解放団, カデットの創立に参加し、1906年の第一国会には書記をつとめた。1918年には、モスクワにおいて反革命団体の《Союз Возрождения》の創設に関係した。1934年頃には文学関係仕事に携りチャアダーエフに関する新しい資料の発見、紹介、翻譯に当たっているが、まもなく死んだらしい。cf. Falk., op. cit., pp. 10-11

32) 《Литературное Наследство》 т. 22-24, стр. 9 このガガーリン版の第四書簡は古代建築とキリスト教について論じたもので、これは第一書簡に先立って1832年「テレスコープ」 no. 11 に《Нечто из переписки N N (с французкого)》と題して発表された。この「テレスコープ」にのった文は、後にゲルシェンゾンが Сочинения и Письма, т. II, стр. 20-25 に再録している。

33) これは1863年《Русский Архив》に紹介された。

34) 《Литературное Наследство》 т. 22-24, стр. 6

35) см. 《Звенья》 т. V, стр. 208

36) これは《Проявления скептицизма. Чаадаев》と題し《Вестник Европы》に掲載された。

37) 《Три западника сороковых годов (П.Я. Чаадаев, В. Г. Белинский и А. И. Герцен)》

38) М. Гершензон, П. Я. Чаадаев. Жизнь и Мышление, спб. 1908. стр. 204~278

39) その一は С. П. Денике の翻譯で1906年カザンで出版されたが、第一書簡は「テレスコープ」の転載であり、第二、第三、第四簡はガガーリン版の露訳である。他は1908年モスクワで出た Кн. М. М. Щербатов の著《О повреждение нравов в России—П. Чаадаев. Философские Письма и Апология сумасшедшего》に無署名の翻譯で収められた。なお雑誌「スラヴ文化研究」I (1958秋) に掲載された安井氏の第一書簡の翻譯は、このカザン版 (実は「テレスコープ版」) とガガーリン版によるものである。

40) см. 《Литературное Наследство》 т. 22-24. стр. 8, Сочинения и Письма т. I, стр. 368

その後ゲルシェンゾンはツルゲーネフ兄弟のアルヒーフの中にあった第一書簡の原稿を発見し、ガガーリン版や先の「哲学と心理学の諸問題」に掲載した自らのロシア諸訳に幾つかの訂正をほどこして⁴¹⁾、これを他の三編の書簡とともに1913年から翌年にかけて自らが編集せる《Сочинения и Письма П. Я. Чаадаева》に収めた。⁴²⁾ゲルシェンゾンはこれを編集するに当って多くの資料の中から全「哲学書簡」の完全な原稿を見出さんと努めたがそれは結局徒労に終り、⁴³⁾のみならずこの「哲学書簡」のシリーズには入らぬガガーリン版の第四書簡を再録するという決定的な誤りをおかしたのであった。そしてチャアダーエフ自身の番号付けによる第六、第七書簡についても、ガガーリンの誤りを踏襲してこれらを第二、第三書簡としてこの中に収めたのであった。⁴⁴⁾

しかしてこのゲルシェンゾン版の不完全さと、それにもとずいて作られた《神秘主義者、チャアダーエフの伝説》⁴⁵⁾は、ようやく1928年に至ってシャホフスコイによってレニングラードの科学アカデミーにおいて発見され、1935年に《Литературное Наследство》の第22—24巻に収められた、新たな五書簡の出現によって、決定的に覆えされるに至った。ここにチャアダーエフ研究は新たな局面を迎える。⁴⁶⁾

これはチャアダーエフ自身によって番号付けられた八編の哲学書簡の中から、未発表だった第二、第三、第四、第五および第七書簡の五編をオリジナルなフランス語ではなく、シャホフスコイの露訳の形で発表されたものである。⁴⁷⁾従って本来からいえばこれをフランス語の原文と比較するという仕事をせねばならないのであるが、現在のところそれができぬ以上、⁴⁸⁾われわれは訳者たるシャホフスコイの経歴、「哲学書簡」のヴァリアントの研究、チャアダーエフに関する著述などからして、彼の翻訳を信用するほかはあるまい。⁴⁹⁾

シャホフスコイの伝えるところによれば、これら八編のフランス語の「哲学書簡」はすべてチャアダーエフ自身の手が加えられており、第三、第四、第五、第八書簡は完全にチャアダーエフ自身によって書かれ、第六、第七書簡は印刷されたばかりの状態でチャアダーエフの加筆訂正の跡をとどめており、第一書簡はよきコピーの状態で保存されている。⁵⁰⁾ただ問題になるのは第二書簡で、これはコピーとしても悪く、さらに冒頭の

及び Quénét, op. cit., p. XI-XII

41) Сочинения и Письма. т. I, стр. 368

42) 第一書簡 стр. 74~93 第二書簡 стр. 94~119 第三書簡 стр. 119~138. 第四書簡 стр. 138~142

43) Гершензон, там же, стр. 71

44) 従ってゲルシェンゾン版によった勝田氏もまた最近出版されたその著においてこの誤りをおかしている。cf. 勝田吉太郎「近代ロシア政治思想史」1961, pp. 914~916

45) Koyré, op. cit., p. 19, n. 4

46) この新たに発見された五書簡に立ってその内容を最初に論じたのは Зеньковский であり、ついで Koyré もこれらをもとにその研究をすすめた。Quénét はこれら新資料の原稿を見ているが (Quénét, op. cit., p. 101 以下、及び《Звенья》т. III-IV, III-IV, М-Л. 1934, стр. 397), 1931年に発表されたその著作では、断片的に取りあげているにとどまり、書簡の番号も誤っている。最近に至って特にこの新たに発見された五書簡に注目して取り上げたのに Falk がある。

47) 従って Koyré は、このシャホフスコイの露訳を再びもとのフランス語に翻訳するという無駄をせねばならなかった。Koyré, op. cit., p. 54 以下

48) Falk はいろいろ努力してみたが、ついにオリジナルなフランス語の写真版を入手することができなかったことを嘆いている。Falk, op. cit., p. 10

49) cf. ibid. pp. 10-11

50) 《Литературное Наследство》т. 22-24. стр. 9

部分が欠如している。⁵¹⁾しかしこの失われた部分は、1871年にジハレフ (М. И. Жихарев) によって《Вестник Европы》の編集部に引き渡された書類の中に入っていることが発見され、⁵²⁾ここに八編の書簡が一応完全な姿をとるに至った。

従って以下に訳出する「哲学書簡」八編は、第二、第三、第四、第五および第八書簡については、この新たに発見された五編のシャホフスコイによるロシア語の翻訳をもとにしたものであり、第一、第六、第七書簡の三編については、ゲルシェンゾン版の第一、第二、第三書簡を底本としたものである。

最後に書簡の書かれた年月日について言及すると、第一書簡はチャアダーエフ自身によって1829年、12月1日と記れており、これは正しいものと思われる。⁵³⁾第二書簡には日付がない。しかしその中に、「ボスポラスとユーフラテスに砲声が鳴響き」⁵⁴⁾とあることから考えて、これは1829年4～5月の事件を指すものであり、書簡の執筆もこの頃から始められたと考えられる。⁵⁵⁾第三書簡は7月1日とだけあって年が入っていない。しかし前述のジハレフの書類中のコピーには1830年とあり、1830年7月1日に稿が成ったと考えられる。⁵⁶⁾第四書簡もまた日付がないが、ジハレフのコピー中には第三書簡と第四書簡が同一の写本に収められそれぞれ6月、7月とあることから、⁵⁴⁾第三書簡に続けて、同じ頃執筆されたと考えられる。⁵⁹⁾第五書簡も日付がなく、これについては他の四編とともに1830年中には書き上げられたと思われる、ということがいい得るすべてである。⁵⁹⁾

日付について特に問題となるのは、次の第六、第七書簡である。すなわち第七書簡の日付は第一書簡に先立つ1829年2月16日となっており、しかもこれはガガーリン版のみならず、後に発見された原稿でも同じ日付になっている。⁶⁰⁾しかればこれを以って、この書簡が第一書簡に先立って書かれた独立の著作かと考えるならば、余りにもしばしば前の書簡に言及することが多いことから、そのようには考えられぬ。そして内容的にも第六、第七書簡は前の五つの書簡に続くことからみて、第七書簡が書き上げられたのは、この書簡をチャアダーエフがプーシキーに貸した1831年春⁶¹⁾以前のことであり、第六書簡はその少し前に書かれたと考えられる。⁶²⁾

51) 先に述べた Quénét 番号の誤りの一因はこの事実による。

52) 《Литературное Наследство》 стр. 9. 19-20 (二つの原稿の冒頭と末尾の写真を参照)

53) ゲルシェンゾンはチャアダーエフの前述ツィンスキーあての手紙などから、これは1828年中に書かれ、この1829年の日付は、書簡の最終的成稿の時期だとしている。Сочинения и Письма, т. I, стр. 368-369. しかしシャホフスコイは、書簡の終りの方でチャアダーエフが言及している英国における「最近の改革」とは、1829年4月のそれを指すものであることを指摘している。《Литературное Наследство》 т. 22-24, стр. 14

54) Там же, стр. 23

55) Там же, стр. 63, n. 10

56) Там же, стр. 68, n. 13

57) Там же, стр. 14. しかし Falk はこれが見当らぬという, op. cit., P. 33

58) Quénét は第三書簡の日付を6月1日、第四書簡のそれを6月30日としている。cf. op. cit., p. 109

59) 《Литературное Наследство》. т.22-24., стр. 77 n. 18 cf. Falk. op' cit., p. 33

60) 《Литературное Наследство》. т. 22-24. стр. 14

61) Сопинения и Письма, т. I, стр. 369

62) 《Литературное Наследство》. т. 22-24. стр. 14

第八書簡は前七書簡とやや調子を異にし、全書簡の《フィナーレ》⁶³⁾と見なされるもので、これは少しおくれて書き上げられたものと考えられる。⁶⁴⁾

しかしてチャアダーエフの1831年6月17日付、プーシキンあての手紙には《J'ai, mon ami, achevé tout ce que j' avais à faire, j'ai dit tout ce que j'avais à dire:》⁶⁵⁾とあることからみて、この頃には「哲学書簡」八編がすべて書き上げられ、しかもそれはこれら八編をもって完結したと見なすことができるものと考えられる。

第一書簡の訳出にあたっては、前に述べた通り、ゲルシェンゾン版のフランス語のテキストを底本としたが、修辞上彼のロシア語訳をも参照したことをことわっておく。なお（ ）内の語と下欄の注は特にことわりのない限り訳者が入れたものである。

書簡の末尾にある執筆場所《Nécropolis》（「死の都」）とはモスクワを指す。⁶⁶⁾

哲 学 書 簡

《第 一 書 簡》

1)

Adveniat regnum tuum.

奥様.

私が気に入りもし、あなたの中で最も高く評価しておりますものこそ、あなたのその飾り気ない卒直さなのでございます。お手紙をいただきました時、どんなに私は驚いたことございましょう。お近付きになりました折に、私があなたのお人柄に魅了されて、宗教についてお話申し上げるようになりましたのも、このあなたの愛すべきご資質故でございました。（当時）あなたの周囲の人々は ごぞって私に沈黙を強いていたのでございます。ですから、お手紙を頂戴しました時に私の驚きがどれほどだったかをもう一度お思いになってみて下さい。あなたは、私があなたのご性格についてどう思っているかあれこれ推測されていられますが、私の申し上げたいことは以上で尽きております。もはやこのことについてこれ以上申しません。直ちにお手紙の重要な部分に立入ることにいたしましょう。

まず初めに、あなたがおっしゃるところの、ご健康を損ねさえるほどあなたを苛立たせ、疲れさせるこの思想の中なる混乱は何に由来するものでしょうか。果してそれは私どもの話合の悲しい結果でございましょうか。あなたの中に目覚めた新しい感情は安らぎと平和をもたらすかわりに、苦悩と疑惑とを、そしてほとんど良心の苛責をすらも

63) Falk. op. cit., p. 34

64) 《Литературное Наследство》 т. 22-24, стр. 14-15

65) Сопинения и Письма. т. I., стр. 161

66) Сопинения и Письма, т. I, стр. 368

1) 「御国の来らんことを」マタイ伝 VI, 10

たらしめたのでした。しかし私はそのことに驚くべきでございましょうか。いいえ、それはわが国ではすべての人の心と精神の中にひそかに存する、悲しき事態の当然の結果なのでございます。この国の社会の最も高い身分の人々から、主人の慰みのためだけ存在する奴隷に至るまで、すべてを動かしているこれらの力の働きにあなたは屈するほかなかったのです。

それにしても、どうしてこの力に逆うことができたでしょうが、あなたはそこご資質から衆人より抜きん出ていられますが、まさにそのような資質が、あなたをしてその呼吸する空気の悪い影響を、より受け易くさせていたに違いございません。失礼をも顧みずに私があなたに申しあげた二言、三言が、あなたを取巻いている環境の中であなたのお考えを果して固めさせることができたでしょうが、また私がこのわれわれの住んでいる環境を清めることができたでしょうが、私は結果というものを予見すべきでしたし、事実予知いたしてもおりました。ですからこそ私はしばしば故意に黙りこんでいたわけなのですが、それによってあなたの魂に確信をもたらすどころか、当然の結果としてあなたを迷わせていたに違いないのです。従ってもし私が、心の中にまどろんでいる宗教的感情がどのような苦悩を呼び起こそうと、それは完全なまどろみに勝るものだということを確認していませんでしたら、私はただただ自分の熱中を悔んだことでございましょう。しかし私は今あなたの心の空を曇らせている雲が、いつかゆたかな露となってお心の中に蒔かれた種を育てることを望んでおります。さらに私にとりましては、自分のつまらぬ二言、三言があなたに影響を与えたということが、やがてはあなたご自身の知性の働きによってより大きな効果を確実にもたらす保証のようにも思われるのです。奥様、恐れることなくこの宗教上の考えがあなたに呼び起した感情に身を委ねることです。純粋な泉からは純粋な感情しか湧くことがないのでありますから。

外的な事柄については、さし当って次のことをお知らせになるだけで充分でございましょう。すなわち、(神・教会の)単一性^{ユニタリ}ということと、真理が次から次へと間断なく続く聖転者に直接に受け継がれるという事実にもとずく至高の原理が、宗教の真の精神に一致しているということをお知らせになればよいのです。何故ならすべては結局は、この世のあらゆる倫理的な力が一つの思想に、一つの感情に融けこむということ、そして人々の間に真理の王国を打ち建てべき一つの社会組織、すなわち教会を次第次第と形成してゆくということに帰すのですから。これ以外の教義は根本原理から逸脱しているという事実だけからも、救世主のいと高き祈りである、「聖なる父よ、われらの如く、彼らもまた一つとならんことを」¹⁾というお言葉の実現を拒否し、この世に神の王国が打ち建てられることを望まぬことにもなるのです。だからと申して、あなたが世の人々にこの真理をお示しにならなければならないというわけではありません。あなたの為すべきことは決してこのようなことではないのです。むしろ逆に、この真理のよってきたる原理自体が、あなたの社交界における立場に鑑みて、あなたにご自分の信仰の内的な光明だけを見るように義務づけているのであって、決してそれ以上ではないのです。私と致

1) ヨハネ伝 XVII, 11 聖書の日本訳では「これ我等のごとく、彼らの一つとならんためなり」とあるが、ここではあえて上のごとく訳した。

しましては、あなたの思想が宗教に向けられるに当って、あずかって力があったということは幸せなことですが、同時に若し私があるあなたのお心に混乱を起こさせて、ながい目で見ればそれがあなたの信仰を冷すことになれば、それは不幸なことと申さねばなりません。

いつぞや私はあなたに、宗教的感情を保つ最善の方法は教会によってきめられたすべての慣習に従うことだと申しあげました。すぐれた精神がよく考え反省した上で自らに課すこのような恭順というものは、人が考えるより多くのものと秘めているものですし、人が神に捧ぐる真の奉仕でもあるわけです。関係あるすべての義務を厳格に励行することほど、人の精神をしてその確信を固めさせるものはありません。のみならず、いと高き叙知より発したキリスト教の儀式の大部分は、その示す真理を吸収することのできる人々に対しては誰にでも真の力を持つものなのです。（この準則には、極めて一般的ではあるがたった一つの例外があります。人が自らの信仰を大衆のそれよりもすぐれたものであることを自覚し、その信仰が魂をしてあらゆる確信の源にまで遡らせ、同時にそれが民衆の信仰と矛盾するどころかその裏付をすることが認められた時にだけ、そしてその時にのみより大きな仕事に専念することができるよう、外的な規律の遵守を無視することが許されるのです。）¹⁾しかしながら、おのれの虚栄の幻想と理性の曇りとをこの上なき光明と取り違えて、その光明が自分をこの一般的準則から免れさせていると思いこんでいる人々こそ不幸と申さねばなりません。しかし奥様、あなたにとりましてその性^{さが}にかくもふさわしいこの謙譲の衣服を身にまとうこと以上に適したことがございましょうか。このようにいたすことこそ、あなたの苛立つ精神を鎮め、あなたの生活に静かな喜びをもたらすということをお信じ下さい。

世俗的な考えにのっとって申しまして、知識の獲得と冥想のまじめな感動の中に魅力を見出すことのできる教養あるご婦人にとって、その生活の大部分を思索と宗礼に捧げること以上に自然な行為がございましょうか。あなたはおっしゃいましたね。ご本をお読みになっている時にあなたがそこに見出される、ちょうど夕暮の美しい景色のようにわれわれの心を鎮め、この恐しくも味気ない現実から一瞬たりともわれわれを連れ去ってくれるような、静かで真剣な生活の姿ほどあなたの想像力に詰りかけるものはないと。ところがこのような光景は決して幻想ではございません。このような魅惑的な想像をどれか一つでも実現させたいとお思いになるのであれば、それはあなたご自身のお気持ち次第ですし、そのためにあなたに欠けているものは何もないのですから。私の申していることが決してきびしいモラルではないということをおわかっていただけることと思います。私はあなたの好みの中に、あなたの想像力のこの上なく魅力ある夢の中に、あなたの魂に安らぎを与え得るものを見出そうとしているのですから。

生命の中には肉体的存在ではなく、知的存在に関係のある面がございます。そして、これを無視することがあってはならないのです。肉体についてある一つの生活規則があるように、魂についてもそれがあるのですが、この規則に従うことを知らなければなり

1) この（ ）内の文章はテレスコープにのったロシア語訳では省かれている。（ゲルシエンゾンの注）

ません。そしてこのことが古くから広く認められてきたことだということも私は存じています。しかしわが国ではしばしばこのことが新しさという価値を持っていると思うのです。他の国では、ある点ではわれわれよりもはるかにおくれた民族においてすら極めてわかりきった真理をわれわれがこれから見出さねばならないということは、われわれの特異な文明のもっとも悲しむべき特徴の一つだと思うのです。そのことはつまりわれわれが、かつて一度たりとも他の民族と一緒に歩んだことがないということ、われわれが人類という大家族の一員に属していないということ、そして東洋でも西洋でもなく、そのいずれの伝統をも有していないということなのです。時の流れの外に置かれていたわれわれは、人類の普遍的な教育というものを受けていないというわけなのです。

わが国以外の国々を今日ある状態にまで到達せしめたところの人類の思想のこの驚くべき結びつき、人間精神のこの歴史というものも、われわれの上には何の影響をもおよぼさなかったのです。他の国々においては、長い時代にわたってまさに社会と生活の基礎を形作ってきたところのものが、われわれにとっては理論と思弁にしかすぎないのです。たとえば奥様、あなたのようにこの世の真と善のすべてを身につけるべくかくも幸せにお生まれになり、魂のこの上なく甘美で純粋な喜びを手に入れる術をすべてお知りになるようにお育ちになったお方が、率直に申しまして、そのような有利な条件をお持ちになられながら、一体どこまで到達されたというのでしょうか。人生というよりも一日一日を充実させるべきものを求めねばなりません。他の国においては生きてゆく上に必要な枠ともいうべきものがあって、この枠の中では毎日のできごとが実に自然に秩序立って整理されますし、またこの枠は体が健康であるためにはよい空気が必要であるように精神の健康によって不可欠なものなのですが、こういった枠があなたがたには完全に欠如しているのです。今こう申し上げていることがモラルの原理とか、哲学的な準則といったことに関するものでは決してないということはおわかりいただけると存じます。私の申しておりますのは、心に安らぎを与え、精神生活に規律をもたらすところの、秩序立った生活、慣習、知性の型とでもいうべきものなのです。

ご自身の身のまわりをご覧なさい。誰もがじっと落着いていないではありませんか。まるでみんな旅をしているかのようです。誰も一定の存在範囲を持たず、何につけ良き慣習というものは全くなく、規範というものがさらにはないのです。一家団楽の中心がないのです。愛情や共感を呼び起し人を惹きつけるものとてなく、何ものも永く留まることなく、すべては心の内にも外にも如何なる痕跡すらとどめることなく過ぎ去って行くのです。われわれは自分の家の中に住んでいながら、あたかも露営しているかのようですし、家族の中にありながら異邦人のごとく、そして町の中に住んでいながら流浪の民のようなものです。いや、われわれが町に心惹かれる以上に、これらステップの放牧の民は砂漠に愛着を持っていますから、彼らよりもわれわれの方がもっと遊牧的ともいえます。どうか今申していることが取るに足らぬこととは思いませんで下さい。あわれな存在であるわれわれは自らの悲惨な状態に、自分で自分を誤認するという不幸を付け加えたり、純粋に精神的な生活を希求したりはいたしますまい。この与えられた現実の中で条理にかなった生き方を学ぼうではありませんか。しかし、はじめにわ

れわれのこの国についてもう少しお話しいたしましょう。これが話題からはずれることにはならないと思います。というものも、この前提がないと私の申し上げたいことがよくわかっていただけないかも知れませんから。

どのような民族にも、はげしい動乱と熱狂的な不安の時代、考え抜かれた動機もなしに行動する時期があります。このような時期には誰もが肉体的にも精神的にも世の中を遍歴しているといつてよいでしょう。これは民族の偉大な感情、偉大な構想、偉大な情熱の時代に当ります。この時期には諸民族は、はっきりとした対象もなしにはげしい勢で行動をしますが、だからといってこれが後世の子孫に何の結果をもたらさないということにはなりません。このような時代をすべての社会は経て来たのです。そしてこのような時代こそ社会に対して、その生き生きとした思い出や、驚くべき行為、自らの詩、そしてこの上なく強く豊かな思想をもたらしたのでした。それこそ社会にとって無くてはならぬ基盤と申せましょう。さもないと社会というものは、その土の芥以外には愛着を感じてつながれるものが思い出の中になにもないことになります。民族の歴史におけるこの興味ある時期こそ、民族の青春時代であり、その力がもっとも強く発揮される時なのです。そしてその思い出は、民族が壮年時代を迎えるにおよんで、喜びともなり教訓ともなるのです。しかし、われわれにはこのようなものが何一つないのです。最初にあったものは未開野蛮であり、それが粗野な迷信的慣習にとって代わり、ついで異国の兇暴にして墮落せる支配を受け、しかもその精神はその後のわが国の国家権力に受継がれたのでした。これこそわれらが青春の悲しき歴史であります。民族の旺盛な活動、^{こころ}精神の力の湧き上るような働きの時期といったものは、全くわれわれには存在しないのです。かかる時代に相応するわれわれの社会生活の時期は、生気のない、力なく澱んだ暗い存在で満たされています。そのような存在を活気づけるのはひとり悪しき行為だけでしたし、隷属だけがかかる存在をなだめおさえてきたのです。われわれの記憶の中には魅力ある思い出とか、壮大なイメージはなく、民族的伝統の中にも説得力のある教訓は何一つとしてありません。われわれの通って来た時代、われわれの占めている地域を一わたり眺めてみてごらん下さい。そこには、魅力ある思い出も、力強く過ぎ去った時代を語り、生き生きとあざやかに昔を思い出させる立派な記念碑も見当らないことでしょう。われわれは過去も未来もなしに、完全な停滞の中であって、この極めて狭い現在だけを生きているのです。もしわれわれも時には立上ることがあるとすれば、それは何か共通の幸福を望んだり欲するからではなく、あたかも乳母が差出すおしやぶりに立ち上って手を差しのべる子供のたわいなさ以外のものではありません。

社会の中における人類の真の発展というものは、ある国民にとってその生活が、初期の時代の不安定な環境を脱して、より規律立った、便利で気持よいものにならぬ限り未だ始まっていないのです。社会が未だその日常のことについてすら、確信も規律もなしにぐらついていて、生活というものが全く整えられていないのに、どうして幸福の芽が熟することを望めましょう。それはちやうど、地球が現在の状態の前には大きな変動の中にあったのにも似た、精神の世界の混沌とした動揺とでもいうべきもので、われわれは未だこういった世界の中に在るのです。

にぶく愚かな状態の中に過ぎた、われわれの初期の時代は、われらの精神に如何なる痕跡もとどめませんでした。そしてわれわれには、自らの思想が宿るべき如何なる個人的なものもなく、人類の普遍的な発展とは無縁の運命によって孤立され、人類が受けついで来た思想を何一つ摂取することがなかったのです。しかし民族の生活が基礎とするのはまさにこのような思想であり、民族の未来やその精神的発展が由って来るのも、かかる思想なのです。もしわれわれが、他の文明国民に似た立場を自らに与えんと望むならば、何らかの方法で、人類の為してきた全教育というものをくりかえさねばならないのです。われわれにとっては、そのためにこそ諸民族の歴史があり、幾世紀にもわたる変遷の結果があるのです。もとより、この仕事は至難であり、多分一人の人がこの大きな目的を果すことはとても無理な話でしょう。しかし、何よりもまず初めに、何が問題なのか、人類のこの教育とは何なのか、われわれが全秩序の中でどんな位置を占めているかを知らねばなりません。

民族が生活するということは、専らその過ぎ去った幾時代もが彼らに刻みこんだ強烈な印象と、他の民族との接触とによるのです。個人個人が人類全体とのつながりを感じるのも、このようにして感ずるわけなのです。

もし昔のできごとの思い出が、現在を過去に結びつけないとしたら、人間の一生とは一体何であろうかと、キケロは申しています。ところが、遺産もなく、われわれよりも前にこの地上に住んだ人間とは如何なるつながりもなしに、まるで私生子のようにこの世に来たわれわれは、自分自身の存在よりも前の教訓となると、何一つ心に留めてはいないのです。(ですから)われわれの一人一人が(人類という)家族の中で断たれた糸をつなぐよう努めねばならないのです。他の民族の中で、慣習とか本性になっているものを、われわれは槌を振るって自分たちの頭の中に叩き込まなければならないのです。われわれの思い出というものは、昨日より前のものはないのです。われわれは自分自身にとっても、いわば他人なのです。私どもの時の中においての歩み方といったら、進むにつれ過ぎ去った前の日が自分にはもう再び帰らぬといった奇妙なものです。これこそ、輸入と模倣の文明が当然に招いた結果なのです。われわれには内的発展とか、自然な進歩とかいったものは何一つありません。新しい思想は古い思想を一掃します。というのも、新しい思想なるものが古い思想に由来せず、何処からともわからぬところから来るからです。完全にでき上った思想だけを取り入れてきたわれわれには、進歩的な思想が精神に刻み込んで、その力となるところの消し難い痕跡というべきものを頭脳の中に残すことがなかったのです。われわれは成長こそしましたが成熟することはなく、進む時は斜めに、すなわち、目的には達しない方向に進んでいるわけです。私どもは、反省ということを教えられぬ子供の如きものであり、成人したとて自分自身のものは何一つ持っていないのです。知識とても存在の表面をかすめるにすぎず、魂とて自らの外にあるのです。まさに、これこそが、私どもの状態なのです。

個人と同様に、民族というものも道徳的な存在なのです。年が個人の教育をするように、一世紀、一世紀が民族に教育を施します。しかしわれわれは、いわば例外的な民族なのです。われわれは、人類全体の一部を構成するというよりも、世界に大きな教訓を

与えるためにだけ存在するといった民族の一つです。この、われわれが教えるように定められた教訓が失われることは、決してありますまい。しかし、人類全体の中でわれわれが果して、いつの日に自己の道の見出すか、また、われわれの運命の終焉の前に、どれほどの苦悩を味あうかは、誰にもわかってはいないことなのです。

ヨーロッパの諸民族には、あたかも一族といった共通の相貌があります。これらの民族は、大別してラテン、チュートン、南欧人、北欧人と枝脈に分かれますが、彼らの歴史に通じている者にとって、はっきり認められる共通の絆によって一つの束に結ばれています。それほど昔のことでもなくとも、全ヨーロッパがキリスト教世界と呼ばれていたことはご存知でしょう。そしてこのような用語は公法にも用いられていたことです。さらにこういった一般的性格以外に、これらの民族の各々は個有の性格を備えています。しかしそれはすべて、もっぱら歴史と伝統に由来しています。つまり、それは民族の思想の世襲財産を為しているわけです。そこでは個人個人が自分の分け前を享受し、さした苦労も努力もなしに、社会のあちこちに散らばっている知恵を人生の中にかき集め、用立てています。ところがこれと比べますと、私たちは人生において何とか自分自身を導くのに役立たせたいと思っても、自分たちの基本的な思想の交流の中に一体何を摂取することができるのでしょうか。どうか今私がここで申しているのが、学問とか読書とか、文学とか科学についてでは全くなく、単に知識の接触についてであることに注意して下さい。つまり私の語っている思想とは、ゆりかごの子供をとらえ、おもちゃの中に子供を取り囲み、母親が愛撫のの中に子供に教えるような知恵であり、さまざまな感情の形をとって、呼吸する息と一緒に骨髓にまで込みこむ思想、人が世間や社会界に出る以前にその人の倫理的存在をすでに作りあげるといった思想なのです。あなたはこれらの思想が何たるかをお知りになりたいとお思いでしょうか。それらは、義務、正義、権利、秩序といった思想なのです。そしてこれらの思想は、まさにそれぞれの社会を形成した諸事件に由来するものであって、その国の社会制度の中に不可欠な要素として入り込んでいるものなのです。

西ヨーロッパの雰囲気というのはまさにこの中にこそあり、それは歴史とか心理を越えた、ヨーロッパ人の生理とも申せましょう。わが国には、これに代る何物がありますか。私が今申したことから、人が何か完全無欠なものを引き出したり、あるいは不易の原理といったものに到達できるかどうかはわかりませぬ。しかし次のことは明らかだと思います。すなわち、自らの思想というものを、社会の中で次第に発展しゆっくりと磨かれてきた思想に全く接触させることのない国民、ただ単に盲目的に表面だけ、それも極めてしばしば不器用に他の国民の模倣をすることによってしか、人間精神の全体的進行に参加しなかった国民のこの奇妙な状態というものが、国民一人一人の精神の上に大きな影響を与えざるを得ないということです。

結局のところ、われわれにはある種の確信、精神の中のある種の方法論、ある種の論理といったものが欠如しているのです。西欧の三段論法もわれわれには知られていないところです。なるほどわが国の最高の頭脳には、軽兆浮薄以上のなにものかがあります。最上の思想というものが一貫性とかつながりを欠いているために、実をむすぶこと

なく眩惑に終って、頭の中で萎縮してしまうのです。人間には、自分を先行者や後継者となつた方法が見付からないと、途方に暮れてしまうといった性質があります。そうすると、すべて確固としたもの、確信というものが失われてしまうのです。永続するという感情に導かれない時には、この世の中で道を失って途方に暮れてしまうものなのです。どこの国にも、このように途方に暮れた存在はありますが、わが国ではそれが一般的な状態なのです。これは、かつてフランス人が非難された輕妙さというものでもありません。この輕妙さというのは、むしろ物事をたやすく理解させる仕方にほかならないので、精神の中の広さとか深さと相容れぬものでは決してなく、交際の際に限りない優雅さや魅惑を添えるものなのです。私のいう輕卒さとは、経験とか予想というもののない生活の上での輕はずみであつて、人類から離れた個人の束の間の存在しか問題にしないものなのです。それはまた、過去の思い出や未来への予想に基づく事物の秩序の中に社会生活や個人生活を形作る、伝来の遺産とか多くの規則とか将来の見込みといったものを重視せぬ輕卒さであり、思想とか関心といった何か共通に有するものの進歩とか名譽というものの評価せぬ輕卒さなのです。われわれの頭脳の中には、共通なものは全く存在せず、すべてはめいめい勝手に、ふらふらと漂っているといった不安定な状態にあります。われわれのなごしの中には、何かしかとわかりませんが、茫洋とした、そして冷たく不確かなものがありますが、これは社会的に最も低い段階にある民族の表情にやや似ているように思われます。他の国、特に南方では人々の顔つきは実に生き生きと表情豊かで、これとわが国民の表情とを較べる時、私は一再ならずわが国の人の押し黙った表情に愕然としたものでした。

外国人は、わが国の下層階級の中に、ある種の無頓着な無鉄砲さを認めて、これをわれわれの長所と考えています。しかし彼らは民族的性格のある一つの特徴しか見ていないのですから、全体を判断することはできないのです。彼らは、われわれをしてしばしば思いきって大胆不敵にするものが、同時に深く立入ったり辛棒強く持ちこたえることを不可能ならしめている同じ原理だということを理解していないのです。われわれをして人生の危険に超然たらしめているものが、同時にすべての善惡、真偽についても無関心たらしめているものであり、これがわれわれから、完成への道へと人を押し進めるすべての原動力と奪っているのだということが彼らにはわかってないのです。まさにこの懶惰な無鉄砲さがわが国においては、いうも辛いことですが、上流階級の人々をすら、他の国では最下層にしか見られぬ惡徳から免がれ難くしているということ、さらにたとえわれわれが若い国民の美徳のいくつかは持っているとしても、成熟した国民の持つ美徳や高度の文明は全く持っていないということを、彼らは理解していないのです。

私はなにも、われわれには惡徳しかなく、ヨーロッパの諸国民には美徳しかない——どうかこのようなことはありませんように——などと申しているのではありません。私がいっているのは諸国民を判断するためには、その存在を形成する一般的精神を学ばなければならないということなのです。何故ならば、民族を道德的完成と無限の發展へと導くものは、あれこれの性格上の特徴ではなくて、まさにこの精神のみなのですから。

大衆というものは、社会の頂上に位置するある力に従うものです。大衆自体は思考す

ることがありませんが、その中の何人かは大衆のために考え、国民全体の知性に刺激を与えてこれを前進させます。多くの人が感ずる一方で、少数の人が思いをこらし、かくて全体としての動きが起るわけです。ただ人間としての外貌だけをもっている愚かな幾つかの種族を除き、このことはこの地上のすべての民族について妥当します。ヨーロッパの原初の民族たるケルト人、スカジナヴィア人、ゲルマン人などには、ドルイド、スカルド、バルドなどといった、彼らなりの力強い思想家がいました。あの合衆国の物質文明が躍起になって滅ぼそうとしている北米の諸民族をごらん下さい。その中にも、おどろくべき深さをもった者がいるのです。

では、あなたにおうかがいいたします。一体われらの賢者は、思想家はどこにいますでしょうか。今まで誰がわれわれの為に考え、また現に考えてくれているのでしょうか。東洋と西洋という世界の大きな分れ目の間にあって、一方の肘を中国の上に、他方の肘をドイツの上においているわれわれは、想像力と知性という知的本質の二大原理を自らの中に融合し、われらの文明の中に世界の歴史を結合させるべきでありますのに。しかし、神がわれらに課した役割は決してこのことにあつたものではありませんでした。それどころか、押の摂理はわれらの運命に思いわずらうことが全くないかのように見えます。神はわれわれに関しては、人間精神に対するその慈悲深い行為を垂れ給うことなく、われらを勝手に放置し、何ごとにあれかかり合いになることを恐れ、われわれには如何なる教訓をも与え給わなかったのです。年ごとの経験もわれわれにとっては全く無であり、時代も世代もわれわれには何の果実をも残すことなく過ぎ去って行つたのでした。われわれ自身を見ていますと、あたかも人類にとって普遍的な法則というものが、われわれには全く適合しないかのように見えます。世の中に孤立しているわれわれは、世に与えるもの、教えるものとして何ものもなく、人類全体の叡知にただの一つの思想として付け加えることがなかったのです。われわれは人類の精神の進歩に何一つ貢献することなく、むしろそこから得たものをば歪めてしまったのです。われわれの社会的存在の最初の瞬間から、人類全体の福祉のためには何ものも生まれ出でず、われらの祖国の不毛の土壤から有為な思想は一つとして芽を出さなかったのです。われわれの環境からは偉大な真理は何いつ生まれることなく、何ごとかを考え出すという労苦を自らに荷すことをせず、ただ他の者の考え出したことから、偽りの外見と無益な華麗さのみを借りて来たのでした。

何と奇妙なことではありませんか。すべてを包括する科学の世の中にあって、われわれの歴史は何ものにも結びつかず、何ものをも説明せず、また何ものをも証明していません。あの世界を震撼させた遊牧の民が、もしヨーロッパに突入する前にわれわれの住む土地を横切ることがなかったならば、われわれは世界史にただの一章をも附加することがなかったかも知れません。われわれが、ベーリング海峡からオーデル川に至る広大な地域を占めていなかったとしたら、注目されることすらなかったかも知れません。かつて偉大な人物りが、われわれを文明化せんと試みたこともありました。そして知識に対する興味を喚起させるために、われわれに文明の外套を投げかけたのでした。しかし、われわれは、その外套を拾い上げこそしましたが、文明にまで手が届くことは全

1) ピョートル大帝を指す。

くなかったのです。また別の折に一人の偉大な皇帝¹⁾が、その光榮ある使命にわれわれをも関与させんとし、勝利をもってわれらをヨーロッパの端から端まで導いたこともあります。しかし、世界中で最も文明開化した国々を通して、この凱旋の行軍から自分の国に帰った時われわれが持って来たものは、もろもろの思想と渴望だけであり、しかもその結末はわれわれを半世紀も逆戻りさせるという大きな不幸にほかならなかったのです。どうもわれわれの血の中には、すべて真の進歩というものを拒絶する何物かがあるようです。つまりわれわれは、はるか後の世のそれを理解し得るもののために、何か大きな教訓を与えるためだけ生きてきたし、現に生きているように思われるのです。人が何といおうと、今日われわれは精神的な秩序の中にブランクを作っているのです。この私たちの社会的存在の驚くべき空しさ、孤立に対しては、ただ呆然自失するのみです。そこにはたしかに、しかとは認め難い運命の役割というものもありましようが、同時に精神の世界のどこにもあるような、人間の役割が疑いなく存在します。ここで再び歴史にたずねてみましょう。歴史こそが民族というものを説明するものなのですから。

活動的な北方諸民族の野蛮さと、キリスト教の高い思想との間に戦が行なわれている中で、近代文明の体系が形成されたわけですが、その時われわれは何をしていたのでしょうか。運命のさだめに圧倒されて、諸民族のふかい蔑みの対象たるあわれなビザンチンの中に、そのわれわれを教育するようになった道徳的規範を求めたのでした。それよりも少し前に一人の功妙心に駆られた者²⁾が、全世界の同胞から民族の一家を引離したので、われわれが摂取したのはこのように人間の情熱によって歪められた思想だったわけです。当時のヨーロッパはといえば（神・教会の）単一性の清新な原理によって活気づいていました。すべてがこの原理から出で、すべてはこれに帰していたのでした。当時、すべての思想の動きは人間の思想の単一性を創り出すことのみを目指していました。すべての動機が普遍的な思想を求めるこの力強い要求にもとずいていましたが、これこそ近代の特質なのです。そして、この驚歎すべき原理から無縁であったわれわれは、結局は征服の餌食となったのでした。もしもわれわれが人類全家族から切り離されていなかったならば、異国のくびきから脱した時に、当時の西欧の同胞の中に咲き誇っていた諸々の思想を利用することもできたかも知れません。しかし実際には、われわれの陥ったのは解放という事実によって浄化されて、よりきびしいものとなった奴隷制だったのです。

当時、ヨーロッパにおいては、その上を覆っていた暗悪の闇からすでに潑刺した光が差しこんでいました。今日、人間精神が誇るところの知識の大部分は当時の精神の中にすでに予知され、社会の性格はすでに決まり、異教的古代を反省しつつキリスト教世界は未だ有していなかった美の形式を見出したのでした。分離せる教会の中に閉じこもっていたわれわれには、ヨーロッパで起った如何なるできごととも届かず、世界の大事においてわれわれには解決すべき何ものもなかったのです。宗教が近代において諸民族に与えたすぐれた資質というものは、健全な理性の目から見て、古代人がホッテントットやラプランド人よりもすぐれている如く、近代人をして古代の人々よりもすぐれたものに

1) アレクサンドル一世を指す

2) Photius (ゲルシエンゾンの注)

しています。しかしこのようなすぐれた資質、人間の知性を豊かにしている新しい諸形式、さらには武力なき権威の服従によって、かつて野蛮であった風習が温和なものに代ったということ、このようなものは一切われわれの国を素通りしてしまったのです。名前こそキリスト教徒ではありますが、キリスト教が、その聖なる創造者によってつけられた道を幾世代にもわたっておごそかに歩んだ時、われわれはといえば、微動だにしないのです。世界が全く新たに再建された時にも、わが国では何一つ築かれることなく、私どもは小さな梁と藁で葺いた茅屋の中に身をひそめていたのです。要するに、われわれのためには人類の新しい運命は実現されなかったのです。キリスト教徒と呼ばれこそしていますが、キリスト教の果実はわれわれのためには実ることがなかったわけです。

ユニークな精神力の明晰かつ直接的働きによって、徐々に為されて来たヨーロッパ諸民族のこの進歩というものを、それがどのようにして形成されたかということをお聞きください。苦勞をせずに、よくわが国の人が考えるように、一挙にわがものとする事ができると推測することは道理に反することではないでしょうか。

キリスト教には教理の基本的部分をなす、純粹に歴史的な側面があるのですが、その中にいわば、キリスト教の全哲学が含まれていないことを見まさんと、キリスト教について何も理解していないことになります。なぜならばこの側面こそ、キリスト教が人間のために為してきたこと、将来も為すであろうことを、われわれに示すものなのです。このように考えますと、キリスト教というものは、人間精神のうつろいやすき諸形式の中にあつて、一つの倫理的体系であるばかりでなく、知的世界の中にあつて普遍的に働く、神聖にして永遠な力であり、その目に見えぬ働きこそわれわれにとって絶えざる教訓にちがいないのです。信経の中に述べられた、普遍的にして唯一の教会を信ずるという教理の意味は、まさにかかるものなのです。キリスト教世界にあつては、すべてが必ず地上における完全な秩序を打建てるべく協力すべきですし、また事実協力してもいいのです。さもなくば、主が永遠の後までその教会におわしますという、主の御言葉が、事実によって否定されることになります。それならば、主の贖いによる新しい秩序、神の王国というものが、この贖いによって消滅さるべき、古き秩序、悪の王国と何ら異ならないことになりますし、完璧といつても哲学者が夢想し歴史の各頁が打消す完成にすぎず、物質的要求しか満たさずに、ただより深い深淵の中に人間をせき立てるためにだけ人間をほんの少し高めるといった、精神の空しいあがきがあるだけになります。

しかし果してわれわれはキリスト教徒ではないのか、ヨーロッパ流の仕方では文明化することはないのであろうか、とあなたはおっしゃるかも知れません。疑いもなくわれわれはキリスト教徒です。しかしエチオピア人もまたキリスト教徒ではありませんまいか。またたしかにヨーロッパ流のやり方以外の方法で文明化することもあり得ましょう。わが国のある人の言を信じなければならぬとするなら、日本はロシアよりも文明化していることになりますから。しかしあなたは、エチオピア人のキリスト教や日本人の文明が、私がたった今申しました、事物の秩序と打建てるものであり、人類の最終的な宿命であるとお考えになりますでしょうか。果してあなたは、このように神と人間の

真理から愚かにも逸脱することが、天国を地上にもたらすことだとお考えでしょうか。

キリスト教の中には、はっきりと異った二つの面があります。一つは個人に対する、他は普遍的な知性に対するその働きかけです。それらはおのずと至高の理性の中では一つに溶け合っていて、必然的に同一の目的に着帰します。しかし神の叡知の永遠の思召が実現される期間というものは、われわれの限りある視界には入らぬものですから、われわれは人間の一生という与えられた期間内に示される神の御業と無限の中でのみ為される御業とを区別せねばなりません。賤い御業が最終的に成就される日には、すべての心、すべての精神が、たった一つの感情、たった一つの思想となり、民族や宗旨を隔てている壁は打ち倒されることでしょう。しかし今日重要なことは、各人がキリスト者全体の使命の秩序の中で如何なる位置を占めているのか、すなわち、全人間社会が目指す目的に協力するためには、自らの中に、また自らの身のまわりにどのような方法があるかを知ることです。

したがって、この目的が達せらるべき社会、すなわち神のさとし給うた思想が成熟し完成すべき社会においては、精神の働きの中に必ずや一連の思想が存在します。このような思想、精神的な環境というものは、当然に、ある生活形態や世界観を生み出します。それらは、ヨーロッパの人間についてと同様、われわれについても各人においてそれぞれ異ってはいても、同一の生活様式を創り出すもので、これこそあらゆる情熱、利害、苦難、想像力、理性の働きがあずかって力あった、十八世紀の大いなる知性の働きの結果なのです。

ヨーロッパのすべての民族は、時代の中を手を手を携えて進んで来ました。今日彼らが自己流のやり方でどのようなことをしているとしても、所詮彼らは同じ途の上にあるのです。これら民族一家の発展を知るためには、別に歴史を研究する必要もないでしょう。タッソーをお読みになるだけで、すべての人がエルサレムの城壁の下にひれ伏しているのをご覧になることでしょう。どうか思い出して下さい。十五世紀もの間彼らは、ただ一つの言葉をもって神に呼びかけ、ただ一つの精神的権威、ただ一つの確信しか持っていなかったのです。十五世紀もの間、毎年、同じ日、同じ時間に、同じ言葉でもって、すべての人々がそのいと深き御恩みの中の栄光を讃えんと、その声を一斉に神に向けたことをお考えになってみて下さい。物質界の調和よりも千倍も崇高な、何と驚くべき同調でしょう。ところでヨーロッパ人が住んでいるこの環境こそ、人類がその最終の目的に到達し得る唯一の場であり、しかもそれは宗教のおよぼした影響の結果なのですから、次のことは明らかです。すなわちもしわれわれの信仰の弱さや教義の不完全さが、今日までわれわれとして、キリスト教的社会思想が発展し形成されたこの全世界的運動の外に留めおいたり、さらにはわれわれをして、キリスト教の完全な成果というものを間接的に、それもおくれてしか役立たせることのできない民族の中に入れるとするならば、われわれはなんとしても自らの信仰を蘇らせ、真にキリスト教的な推進力を自らに与える必要があります。何故ならヨーロッパにおいては、すべてはキリスト教によって為されたのですから。私があなたに対して、わが国において全人類的教育を再び始めねばならないと申しました時、私の申し上げたかったことは以上のようなことだった

のです。

近代社会のすべての歴史は（人々の）意見の上に形成されます。ですから真の教育もこの場において為されるのです。そもそもの最初から、この基礎の上にうち立てられた社会は、思想によってしか進まないものです。そこでは利害というものは思想の後に来るものなので、思想より先走るとは決してありません。常に人の意見が利害関係をうみ出すのであって、利害が人の意見を引き来すことは決してないのです。またそこではすべて政治的な革命も、精神的な革命原理の中でしか起きません。人々は真理を追求しつつ、自由と安寧とを一緒に見出したのです。近代社会とその文明の現象は、このようにして説明され得るものであって、それ以外の方法では全く理解できないものなのです。

宗教的迫害、殉教、キリスト教の布教、異端、宗教会議、これらこそははじめの幾世紀かを彩ったできごとでした。この時代全体の動きというものは、野蛮人の侵入をも含めて、近代精神の揺籃期の努力と結びついています。ついで第二の時期を彩るものとして、階級の形成、精神的権威の中央集権化、北方諸国におけるキリスト教の絶え間なき伝播があげられます。これらについて、宗教的感情の最高度の昂揚、宗教的権威の強化がありました。古代の選良民族の歴史と同じように、近代人の歴史をも聖なる歴史と呼んで、これを完成させるものは、知性の面での哲学・文学の発展と、宗教における風俗・習慣の純化なのです。そして最後に再び宗教的反作用があって、人間精神に対して宗教が与えた新たな飛躍が社会の今日の様相を決定づけたのでした。このようにして、近代の諸民族にあっては唯一ともいえる主たる関心は、常に人々の考えの中のみあったのです。物質的な、実利的な、個人的利害というものはすべてこの中に吸収されていたのでした。

私としても、かかるより高き完成を目指しての人間の本質の飛躍を、人が狂信とか迷信とか呼ぶことは知っております。しかし人が何とそれを呼ぼうと、全くもって唯一つの感情の所産たるこの社会的発展が、諸民族の性格の中に善悪を問わずどんなに深い刻印を押したかを一つお考えになってみて下さい。宗教戦争や、不寛容によって点火された火刑の薪の山に対して、皮相的な哲学がどんなにわめき叫ぼうと、好き勝手にさせておけばよろしいのであって、むしろわれわれは、もろもろの意見の混乱と、真理のための血なまぐさい争いの中に、一つの思想の世界を自らのために作りあげた民族の運命をただただ羨望するだけなのです。かかる思想の世界というものを、われわれは、現在望んでいるように自らの骨肉と化することができないのみか、それを想いみることもすらできないでいるのです。

もう一言申しますならば、理性とか徳とか宗教とかが、必ずしもヨーロッパのすべての国に浸透しているわけでは決してありません。しかしヨーロッパにおいては、何世紀もの間すべてが、至上の権威をもって君臨して来た一つの力によって玄妙に支配されて来たのです。そこではすべてが社会の現在の状態を産み出した諸事実、諸思想の長い連鎖の結果になっているのです。就中次のことはその証拠と申せましょう。容貌については最もはっきりと個性的で、制度については近代精神をこの上なく明瞭に刻みつけているイギリス人には、適切に申せば宗教の歴史しかなかったのです。彼らの自由と繁栄

がお蔭を蒙っている最近の改革¹⁾も、ヘンリー八世にまでさかのぼる、この革命をもたらした一連の諸事件と同じように、宗教的發展にはかならないものなのです。すべての時代を通して、純粹に政治的な利害というものは第二義的な動機にすぎず、時には全く消え失せるか、さもなくば思想の犠牲に供されたのでした。この手紙を書いている現在でも²⁾、この選ばれた国を動かしているのは未だに宗教的関心なのです。しかしもし人が理解する労をいとわないならば、一般的に申しまして、ヨーロッパの諸国民の中で一体、その民族的自覚の中に、宗教思想の形をとったところの常に生命を賦与する原理たる、またその存在の全時期を通じてその社会的存在の魂でもある、この特徴的な要素を見出さなかった国民が果してあったでしょうか。

キリスト教の働きというものは、決して人間精神におよぼす直接、即座の影響だけに限られるものではありません。それが生むべく運命づけられた偉大な成果は、無限の倫理的、知的、社会的結合の結果にはかならず、人間精神の完全な自由は必ずこの結合の中に可能なかぎりの広さを見出すはずです。したがって、今世紀の第一日から、というより正しくは救世主がその使徒たちに「全世界を巡りてすべての造られしものに福音を宣伝えよ」³⁾とおおせられたその瞬間から為されたすべてのことは、キリスト教に対するあらゆる攻撃をも含めて、キリスト教の働きというこの広い考えの中に完全に入ってしまうのです。キリストの予言が実現されることを信ずるためには、自覚していようといまいと、自発的たると否とを問わず、すべての人の心の中にキリストの力がまんべんなくおよんでいることを見れば足りるでしょう。ですから、今日のヨーロッパ社会の中には、たとえ不完全なもの、欠点あるもの、咎めるべきものが幾多あるにも拘らず、それでも神の王国がある程度は実現したといえるのではないのでしょうか。なぜならば、ヨーロッパは自らの中に、その無限に発展する原理を含み、また将来この地上において確固として立つべく必要なすべてを、萌芽とか要素の形で所有しているのですから。

奥様、この宗教の社会におよぼす影響についての考察を終る前に、かつて私があなたのご存知ない著作の中で語ったことをここに書き写すことにいたしたいと思います。

私は次のように申しました。すなわち、どのような仕方であれ、たとえ争うためであっても、人間の思想が関わるところ至るところに、キリスト教の働きを見ない限り、人はキリスト教についてのはっきりした考え方を持っていないということです。キリストの御名を口にする時、人は何をしても、この御名によってのみ心をとらえられるのです。キリスト教の聖なる起源をはっきりと理解させるためには、その絶対普遍性にまさるものではありません。それはキリスト教をして可能な限りの方法で人々の魂の中に入り込ませ、それとわからぬ間に人々の精神をしっかりと捕え、人が全力をあげてキリスト教と争っている時にすら、かつて見ざりし真理を人の知性に導入し、かつて感じざりし感動を心にそれと感じさせ、気づかぬ間にわれわれを一般的秩序の中に据えるように感情をかき立てることによって、人の精神を支配し服させるものなのです。このようにキリスト教によって、人間一人一人の役割は決められるとともに、すべては唯一の目的に

1) 1829年 (ゲルツエンゾンの注)

2) 解説注 53) を参照

3) マルコ伝, XVI, 15

向かって協力するのです。このようにキリスト教を見て来ますと、キリストの予言の一つ一つが明白な真理になってきます。こうしてみますと、主の全能の御手が人間の自由を侵したり、その本来の力を無力化するどころか、人の能力を無限にまで高め強めながら、人びとをしてそれぞれの運命に導く、全能の御手の働きが、はっきりとわかってきます。ですから、たとえ新らしい制度のもとにあっても、すべての精神的な原理は以前と同様に働らき、思想のこの上なく創造的な力や、感情のはげしい高揚、さらには力強い魂のヒロイズムや、おだやかな精神の恭順さなどといったすべてのものが、キリスト教の中にその占むべき位置と適応とを見出すこともおわかりになることと思います。キリスト教思想というものは、あらゆる理性的な存在に理解されて、われわれの心臓の鼓動の一つ一つの動きとともに——それが何について脈打つものであれ——すべてを自らの伴侶にして、途上で出会う障害すら利用しつつ強大になって行く行くものです。かかる天啓の思想は天才にあっては、他の人間の到達できぬ高みまで達せしめ、謙恭な人の場合には、手探りながら歩調のとれた落ち着いた足取りで前へと進ませるものなのです。さらにまたそれは、瞑想的な人にあるは深遠にして絶対的な思想となり、想像力に満ちている魂においては天駆けるイメージによって富んだものとなり、愛するやさしい心では慈悲と愛とに変じ、そしてこのような思想に身を委ねた人においては、その人の知性をば情熱と力と明晰さとをもって満しながら、力強く前進するものなのです。如何に様々の資質が、どんなに多くの力がこの思想によって動かされていることか、如何に多くの異なった才能がたった一つのものを創造しつつあることか、そして異なって作られたどんなに多くの心臓が、このたった一つの思想に脈打っているかをご覧になって下さい。しかも社会全般に対して働く、キリスト教の御業はこれよりももっと素晴らしいものです。新しい社会発展の絵巻物を掲げるならば、如何にキリスト教が人間の利害全体をばその本来の利害にかえたり、いたるところに物質的要求を精神的要求にかえることを見ることでしょう。また人はそこに、思想の領域におけるかつて如何なる時代、如何なる社会にもその例を見ないこの偉大な戦、すなわち、その国民の全生活が一つの大きな思想、無限の感情となった思想と思想の争いを見ることでしょう。個人生活も社会生活も家庭も祖国も、科学も詩も、理想も想像力も、思い出も希望も、喜びも苦悩も、すべてがキリスト教に、そのみに帰することをご覧になることでしょう。神ご自身によってこの世に印されたこの偉大な動きの中に、自分がなしとげた結果を身をもって味わうことのできた人びとはまこと幸せなるかなと申せましょう。しかし必ずしもすべての人びとが能動的に自覚をもって行動しているわけではありません。大衆というものは、自らを動かす力を自覚することも、自らが押しやられている目的をもかい間見ることすらなく、生命としてなき原子、愚かな群衆として盲目的に行動しているだけなのです。

今や奥様、ご自身のことに立ち戻るべきでございましょう。しかし私にとっては、この一般的な考察から離れることは難しいことだと申さねばなりません。私はこの高みより眼前に開かれた絵巻物の中から、すべての慰めを引き出しているのです。自分を取巻くいとうべき現実悩まされつつも、もっと澄んだ空気を吸って、もっと晴れ晴れした空を眺めなければと思いながら、私はこの人類の未来の幸福についての甘い確信の中に

哲 学 書 簡

身を避けているのです。しかし私はあなたのお時間を邪魔したとは思っておりません。私にはあなたに対してキリスト教世界をどこからどのように見るか、またこの世界でわれわれを一体何をしているのかをお知らせする必要があったのです。わが国に対する私の語り口が厳しいものとお思いかも知れませんが、私はただ真実を語っただけですし、それもすべての真実を語りつくしたというわけですらないのです。それにキリスト教的理性は、人に如何なる種類の理性の曇りをも許さぬものですが、なかんづく、民族的偏見は何よりも人と人とを離反させる故に許さぬところなのです。

奥様、どうやら大変長い手紙になってしまいました。ここらで二人とも一息入れる必要がありますでしょう。私は当初、申し上げたいことは二言三言でいい尽くせると思っておりましたが、思いかえしてみますと、このことについては優に一卷の書物をも著わせることに気づきました。どうかこの企てがあなたをお気に入るか申して下さいますように。しかしそれはそれとして、私どもはこの主題に取り掛ったばかりですから、あなたは第二の手紙をどうしてもお受取りにならねばなりません。さし当っては、この第一の手紙の冗慢さを、私が返事を長いことお待たせしたつぐないとお考え下されば幸甚です。あなたからのお手紙を受取ったその日にも、私は早速に筆を執ったのでございますが、当時私の心はいとうべくうんざりする心配ごとで一杯だったものですから、かくも大切なことについてあなたにお手紙を書く前に、そのような雑用を先ず片付けてしまわねばならなかったのです。そしてその後で、全く判読できない私のなぐり書きを清書しなければならませんでした。この次はこれ程長くお待たせすることはなかろうかと存じます。早速明日にも筆を執る所存でございます。

ネクロポリス、1829年12月1日